クリプキ以後の様相的認識論

——思考可能なものは成立可能か？——

佐金　武

1.　はじめに： 思考可能性は欺くか？

思考可能であるということ[1]、それは、純粋な哲学的思弁における「思考実験」のみならず、科学者たちによる仮説形成や日常の何気ない推論という実践的な場面にまで浸潤する、必要不可欠の方法論であるように思われる。もっとも、思考可能なものすべてが、単なるSF的虚構を超えて現に成立する可能性であるとはいえないだろう。しかし、このことから思考可能性による知の方法は、我々を惑わすものと結論してよいのだろうか。本論の目的は、クリプキの議論を出発点として、近年提出された思考可能性についての代表的なふたつの説を概観し、以上の問いに答えるための視座を見いだすことにある。

2.　クリプキ： 非認識論的＝形而上学的な可能性という「ミニ世界」

『名指しと必然性』の有名なテーゼによると、名辞「a」と「b」が固定指示子であるとき、同一性言明「a＝b」は、それが真であるならば、必然的に真である。ここで、固定指示子とは、すべての可能世界で同一の対象を指示する名辞である。「アリストテレス」のような固有名は、その典型である。固定的に対象を指示するために導入されたある種の記述、たとえば「夕方西の空にひときわ輝いてみえる星」も、固定指示子に含めてよいとされる。さらに「虎」や「水」などの自然種名は、ある対象にとっての何らかの本質を名指し、その集合を固定的に指示する働きをもつ語であるから、固定指示子という概念の拡張と見なされる。さて、「宵の明星＝明けの明星」という同一性言明について考えよう。言明に現れる二つの名辞は、固定指示子である。つまり、これら二つの名辞はともに、 すべての可能世界で同一の対象、すなわち金星を指示する。それゆえ、「宵の明星＝明けの明星」は、「金星＝金星」というにほかならず、必然的に真なる言明である。

クリプキの見るところでは、この種の同一性言明は必然的真理であるにもかかわらず、かかる必然性をア・プリオリ性という認識論的概念と混同する誤りがしばしば犯されてきた。必然性をア・プリオリ性と等価と考えるならば、「宵の明星＝明けの明星」という事実は、天文学上の発見であるから、ア・プリオリな真理ではなく、それゆえ偶然的事実であるということになる。しかし、これは誤りである。なぜならば、同一性言明が偶然的真理

であると考えることは、ある対象がそれ自身と同一でないということがあり得る、つまり「金星≠金星」があり得るという成立不可能なことを含意するからである。

ア・プリオリ性と必然性の混同は、次のようなことから発生すると考えられる。古代ギリシア人が朝方にみえる星を「明けの明星」、夕方にみえる星を「宵の明星」と名付けた状況と質的にあるいは認識論的に同じであって、しかしそれらの名前によって指示された対象が異なるふたつのものであるということが判明するような状況は、一見思考可能である。そして、ア・プリオリ／ア・ポステリオリの認識論的な区別は、この思考可能性を介して、当の事柄の成立可能性や不可能性について何ごとかを語るという混乱が生じる。他方クリプキにとって、様相の概念は、認識論的なそれと混同されてはならず、彼が「形而上学的可能性」と呼ぶものに限られる。比喩的にいえば、クリプキの可能世界とは、「遠く惑星のようなもの、すなわち我々自身の環境に属しはするがどういうわけか異次元に存在しているようなもの」と見なされるべきではなく、「学校の確率論のミニ世界を大きくふくらませた以上のものではない」[Kripke, 1980: pp. 15-8 (邦訳 17-8 頁)]。

パトナムの報告によると、「ある事柄が思考可能であるということからそれが成立可能であるという推論は、否定されるべきだ」ということは、クリプキ以降の哲学者たちの一般的モラルであった[Putnam, 1990: pp. 54-5]。パトナム自身、これを支持する議論を提起していた。有名な「双子地球」の思考実験である[Putnam, 1983: pp. 223-7]。「水は無色透明である」、「無味無臭である」、「乾きを潤す」等々の、我々の心的状態に依存する質的な記述のもとで、「水＝XYZ」が判明するような状況を思考することはできるが、現実の自然環境のあり方を考慮した上での「水」の本質規定（科学を前提すれば、現在のところ「水＝H_2O」ということになるだろう）に照らして、それは成立不可能だ。つまり、「水＝H_2O」は、物理的に必然である。いずれにせよ、クリプキやパトナムのいう必然性は、我々の認識には依存しない成立可能性にかかわる。しかしここで、思考可能性という知の方法によってこの種の成立可能性へと接近することが、禁じられているというのは本当だろうか。

3．様相的認識論：「思考可能性-成立可能性テーゼ」への二つの経路

クリプキらが示したように、思考可能なものすべてが、直ちに成立可能であるとはいえない。そこで検討されるべきは、次のような問いである。すなわち、適正な意味での思考可能性は、成立可能性への信頼できる道標となるか。またそうであるなら、どのような条件においてか。これらを考えるにあたって、認識論と様相の絶対的な断絶はないと主張するヤブロ[Yablo, 1993](2)と、認識論的二次元主義という新たなパラダイムを提示し様相の合理主義を擁護するチャーマーズ[Chalmers, 2002]による、代表的な議論を以下に概観する。

3.1　ヤブロ：思考可能性と成立可能性とのつながりを断つ一般的な理由は存在しない

ヤブロは、思考可能性と成立可能性とのつながりを擁護し、「思考可能性が成立可能性への信頼の置ける道標とはならない」とする大きく三つの批判を検討して、それらに対する反論を展開している。三つの批判はそれぞれ、「混同を批判する異論」、「循環を指摘する異論」、「ア・ポステリオリな必然的真理からの異論」と呼ばれる。

「混同を批判する異論」とは、以下のような議論である。まず、その偽なることが不確かなすべての事柄、つまりそれを消極的な意味で（偽であるとして排除できないという意味で）信じることができるようなすべての事柄は思考可能である。そこで、思考可能性は成立可能性への信頼の置ける道標であると仮定する。しかしそうすると、我々の認識状態が貧弱であればあるほど、より多くの不確かな事柄が信憑性をもったものとして思考可能となり、したがってそれらすべてが成立可能と見なされる。このおかしな結論は受け入れることができず、思考可能性と成立可能性を混同する仮定は斥けるべきである。

以上の議論に対してヤブロは、「不確かさ＝信じることができること＝思考可能性」という第一の前提を批判する。たとえば「私は存在しなかった」は、思考可能ではあるが、しかし私はそれを信じない。このことは、思考可能なものが、必ずしも信じることができるものではないことを示している。さらに、ゴールドバッハの予想の否定を信じることはできるが、それは思考可能であるとか思考不可能であるとかというよりはむしろ、現時点で我々はそのどちらであるのかを決定できない、という方が正しい。いずれの場合にせよ、「信じることができること＝思考可能性」であるとはいえない。

「循環を指摘する異論」とは、およそ次のような議論である。ある命題 P が成立不可能な事柄を表現しているにもかかわらず、その成立不可能であることに無知であるとき、私は P を思考可能であると考えるだろう。このようなことが起こらないといえるためには、ある事柄が思考可能であるということに先立って、当の事柄の成立可能性・不可能性を予め知っているのでなければならない。しかしそうすると、思考可能性が成立可能性へと導くという主張は、循環に陥ることになる。

以上の議論に対してヤブロは、概ね以下のように考えている。「命題 P は思考可能だが成立不可能である」という前提の根拠が不明である。無知であるということは、その事柄の成立可能性と不可能性のどちらも決定できないということであり、それをめぐる討論は蓋然的であってよい。つまり、「命題 P は思考可能であって、成立可能である」と主張するために、その真理性が予め担保されていなければならないと考える必要はない。逆にこれに対するアンチ・テーゼを主張する側も、このような対話のなかにあって、相手の主張が真理保存的でないという理由のみで拒否することはできない。こうした場面で求められ

ることは、自分の立場がよりもっともらしく、相手がそうではないのはなぜかを、真理保存的でないことの指摘とは独立に、説明することなのである。

「ア・ポステリオリな必然的真理からの異論」は、クリプキやパトナムの議論を援用する。それによれば、ア・ポステリオリな必然的真理の否定は、それが成立不可能であるにもかかわらず、(多くの場合)思考可能である。天文学上の発見以前の認識状態のもとでは、「宵の明星は明けの明星よりも寿命が長い」と考えることはできたであろうが、「宵の明星＝明けの明星」ということが判明した以上、これは成立不可能である。さらに、質的な経験の観点からみると相違がないにもかかわらず、「水＝H_2O」ではなく、「水＝XYZ」であるような状況は思考可能であるが、これも成立不可能である。よって、ある事柄が思考可能であるということは、それが成立可能であるということの証明にはならない。

この異論に対するヤブロの戦略は、その議論が有効である限りでの思考可能性の身分を明らかにして、適正な意味でのそれと分別するというものである。彼の分析によると、クリプキらのいう思考可能性とは、ある人がある命題Pを信じることを正当化する証拠を得たと想像できるということである。この種の思考可能性は、命題Pを事実のとおりに信じているという意味での想像可能性とは異なる。なぜなら、前者は、必ずしも後者を含意しないが、後者にとっては、前者は派生的であるに過ぎないからである。現に我々は、「宵の明星＝明けの明星」や「水＝H_2O」等々を事実との符合によって真だと信じているのだから、「宵の明星は明けの明星よりも寿命が長い」や「水＝XYZ」等々は、この意味では想像できない。しかしなお、「宵の明星≠明けの明星」や「水≠H_2O」等々を正当に信じることができるような状況を想像することはできる。クリプキらは、命題Pを信じることが無理もないという意味での想像可能性を前提にしているのではないか。

しかし、ヤブロはまた、「宵の明星≠明けの明星」や「水≠H_2O」等々が、事実との符合によって真だと信じられているという意味で想像可能であるという見方が、全く無意味ではないことを認める。命題Pの表現することは、現実世界でそれが表現することに限る必要はなく、異なる文脈においては異なることを表現すると考えることができるからである。我々は、現実世界で「宵の明星≠明けの明星」が表現すること（すなわち「金星≠金星」）を真であるとは信じないが、我々とは異なる文脈の住人たちが「宵の明星≠明けの明星」によって表現することは、我々ならば「金星≠火星」と理解するような事柄だとすれば、彼らがそれを真だと信じていると想像することはできるであろう。要するに、命題Pが事実との符合によって真であるとは信じられていないが、それにもかかわらず、ある別の文脈においては現実に真であり得るような何ごとかを表現し、かつそれがそのようなものとして信じられているという意味での想像可能性というものが考えられる(3)。

以上二つの種類の思考可能性は、成立可能性への信頼できる道標であるとはいえない。しかし、これらから分別された命題Pを事実との符合によって真だと信じているという意味での想像可能性に対して、「ア・ポステリオリな必然的真理からの異論」は不十分である、とヤブロは診断する。この思考可能性の概念は、より正確には、次のように定式化される。すなわち、命題Pが思考可能であるということは、ある世界が少なくともひとつ存在し、それについて命題Pが事実との符合によって真なる記述となることを想像できるということである(4)。さらに、命題Pが思考不可能であるということは、命題Pを偽にはしない世界が存在するということが想像できないということである。これらのことから、思考可能性の否定形（命題Pが真なる記述となるような世界を想像できない）と思考不可能性の否定形（命題Pを偽にはしない世界が存在するということが想像できる）は、互いに排他的であるわけではなく、非決定の場合がその中間域を占めることが分かる。

確かに我々は、不確定な成立可能性に関して誤った見解をもつかもしれない。また、さまざまな異論が示していたように、不適正な思考可能性による誤謬推理も皆無ではない。しかし、思考可能性と成立可能性とのつながりを断つ一般的な原理は存在しない、というのがヤブロの結論である。様相に纏わる特定の誤りについては、それが探知され訂正される限り、「思考可能性–成立可能性テーゼ」の全体的な脅威となるには及ばないのである。

3.2　チャーマーズ： 合理的熟慮による思考可能性は成立可能性を含意する

チャーマーズの示唆するところでは、対照的な二つのタイプの思考可能性が三つの組を成していて、その組み合わせから合計八通りの思考可能性の概念が区別される。第一の組は、「一見したところの思考可能性」と「理想的な思考可能性」の対立を示す。ある事柄がその第一印象に基づいて思考可能であるとき、それは一見したところ思考可能であるという。それに対して、ある事柄が合理的熟慮に基づいて思考可能であるとき、それは理想的に想像可能であるという。一見したところの思考可能性から引き出されるある人のもつ知識は、理想的な思考可能性を有したより欠点のない存在者にとってはア・プリオリに知りうるところの、よりよい推論によって覆されることがあり得る。

第二の組は、「積極的な思考可能性」と「消極的な思考可能性」から成る。ある事柄が成立する状況を何らかの仕方で心に抱くことができるとき、それは積極的に思考可能であるという。ある事柄がありえないものとしてア・プリオリな仕方で排除することができないとき、それは消極的に思考可能であるという。積極的に思考可能なものは、消極的に思考可能でもあるが、逆は一般に成り立たない。

最後に、「一次の思考可能性」と「二次の思考可能性」の組がある。ある事柄が現実のも

のとして成立することが思考可能であるとき、それは一次的に思考可能であるという。ある事柄が反事実的に成立しえたということが思考可能であるとき、それは二次的に思考可能であるという。前者はある可能世界を現実のものとして中心化する作用であり、後者は現実世界が固定された上での諸々の可能性を思考する[(5)]。

以上のようなタイプ分けをもとに、思考可能性と成立可能性とのあいだのギャップは、次のように整理される。第一に、一見したところの思考可能性は、理想的な合理的反省のもとでのよりよい推論によって覆されるかもしれず、成立可能性への道標としてはあまり信用をおけない。第二に、積極的に思考可能であるものは、それが消極的にも思考可能であることを含意するが逆はいえないので、少なくとも一見したところの思考可能性に関しては、消極的な思考可能性は、積極的な思考可能性ほどは信頼できない。

第三に、一次的な思考可能性は、二次的な成立可能性への不確かな道標である。クリプキらが論じたように、「明けの明星≠宵の明星」あるいは「水≠H_2O」であることを含むような、一次的に思考可能な世界からは、「明けの明星＝宵の明星」あるいは「水＝H_2O」であるような、二次な意味での成立可能な世界へと至ることができない。しかし、ここでチャーマーズは、二次元の可能世界意味論の枠組みを下敷きに、認識論的二次元主義と呼ばれる考え[(6)]を展開する。一次元の可能世界意味論では、一次／二次という様相の区別はなく、現実世界を所与とした上で諸々の可能世界を考えるが、二次元の枠組みでは、現実世界として中心化される世界もパラメーターである。ゆえに、二次的な成立可能性の領域は、どの世界が中心化されるのかということと相対的に評価される。そうすると、「一次的な思考可能性は、二次的な成立可能性を含意する」と考える必要はなく、「一次的な思考可能性は、一次的な成立可能性を含意する」ということが擁護できればよいのである。

さて、このようなギャップを自覚した上で、チャーマーズは、思考可能性と成立可能性との含意の関係について、次に示すふたつのものを中心に検討している。第一のテーゼによると、理想的かつ一次的かつ積極的な思考可能性は、一次的な成立可能性を含意する。第二のテーゼによると、理想的かつ一次的かつ消極的な思考可能性も、一次的な成立可能性を含意する。積極的な思考可能性と消極的なそれとのギャップを考慮に入れると、これらのテーゼに対する反論としては、第一のテーゼを受け入れるが第二のテーゼを拒否するような反論と、第一と第二のテーゼをともに拒否する反論のふたつが考えられる。

第一のテーゼを受け入れ第二のテーゼを拒否する反論は、次のような主張と実質的に等しい、とチャーマーズは指摘する。すなわち、理想的な合理的熟慮の上で、積極的には一次的に思考可能ではないが、消極的には一次的に思考可能であるような諸言明、彼の言葉では「不分明な領域」が存在するという主張と等しい。そのような諸言明は、次のいずれ

かに分類することができる。最初の候補は、世界についての質的に完全な記述を与えられているのに、認識論的には接近できないような「不可解な諸言明」である。もう一つの候補は、ありえないものとしてア・プリオリには排除できないが、積極的に思考可能ないかなる状況によっても立証されないような「未決着のままの思考不可能な諸言明」である。チャーマーズの示唆するところでは、このような言明のいずれの集合も空であり、不分明な領域は存在しないとするのが妥当である。これが正しいとすれば、第一のテーゼを受け入れつつ、第二のテーゼを拒否することはできない、ということになる。

積極的な思考可能性と成立可能性とのつながりを主張する第一のテーゼを拒否する、もう一つの反論についてはどうだろうか。チャーマーズによると、このテーゼが間違っているというためには、「強い必然性」が存在せねばならない。つまり、積極的に思考可能な何らかの状況によって偽であるとされながらも、すべての可能世界で真であるような諸言明が存在せねばならない。彼は、いくつかの候補を批判的に検討した上で、強い必然性がなければならないとする議論は支持できないと結論する。それゆえ、第一のテーゼは（前段の議論により第二のテーゼもまた)、認められるべきであるという。

以上の考察から、次のいずれかの合理主義が支持される。「弱い様相の合理主義」によると、（理想的かつ一次的かつ）積極的な思考可能性は、（一次的な）成立可能性を含意する。「強い様相の合理主義」によると、消極的な思考可能性も、成立可能性を含意する。「純正の様相の合理主義」によると、積極的な思考可能性と消極的な思考可能性と成立可能性は、論理的に等値である。チャーマーズの診断では、「弱い様相の合理主義」は確信の持てる最善の立場であり、「強い様相の合理主義」はそれに信頼を置くことが理にかなった立場であるが、「純正の様相の合理主義」の真偽のほどは定かではない。いずれの場合にせよ、「我々は、それ以上でもそれ以下でもない（諸々の可能性という）星たちへの接近を許す望遠鏡を手にしている。この望遠鏡は、あらゆる星の正確な成り立ちを教えてくれる」[Chalmers, 2002: p. 195]、と彼は宣言する。

4. むすびに：「ミニ世界」から思考可能性の宇宙へ

本論を通じて我々は、思考可能から成立可能への推論一般を拒否するクリプキ以後の哲学的合意から、ヤブロによるそれへの批判、そしてチャーマーズの様相の二次元主義に至るまでを概観した。ヤブロは、「ミニ世界」に接近するために思考可能性の資源を利用してよいという主張を擁護することで、クリプキのモラルに対する反論を提示した。チャーマーズは、合理的熟慮が開示する認識論的な可能性の宇宙を論じ、非認識論的＝形而上学的な「ミニ世界」を超える枠組みがあり得ることを示唆した。最後に、思考可能性-成立可能

性テーゼが、心身二元論（デカルト）や因果の非実在（ヒューム）などの論証において、重要な役割を果たすこと[*cf.* Cleve, 1983: pp. 36-9]に注意を喚起しておく。

註

(1) 本論では、英語の conceivability を「思考可能性」、imaginability を「想像可能性」とした。ただし、その緊密な関係性は否定しがたい。また、possibility は世界・状況・事態などの「（成立）可能性」とする。
(2) ヴァン・クリーヴによる先行研究も、合わせて参照されるべきである[*cf.* Cleve, 1983]。
(3) 文脈に依存する思考可能性へのヤブロによるこの懐疑的な姿勢は、認識論的二次元主義をとるチャーマーズの立場とは対照的である。
(4) これは、ある世界のなかにおいて、命題 P が真であると信じることができるということと同じではない。再び「私は存在しない」を例にとって考えよ。
(5) 大雑把に言って、一次／二次の英語の文法上の差異は、直説法と仮定法の条件文に対応する。
(6) チャーマーズによる認識論的二次元主義については、そのアイデアは主著『意識する心』のなかで示され[Chalmers, 1996: pp. 57-71 (邦訳 85-102 頁)]、他所にも展開されている[*e.g.* Chalmers, 2004]。

.

引用文献・参考文献

Chalmers, D. J. (1996) *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press, Oxford. (邦訳『意識する心』林一訳, 白揚社, 2001 年)

── (2002) “Does Conceivability Entails Possibility?” in *Conceivability and Possibility*, eds. T. S. Gendler and J. Hawthorne, Clarendon Press, Oxford, pp. 145-200.

── (2004) “Epistemic Two-Dimensional Semantics”, Philosophical Studies, Vol. 118, pp. 153-226.

Cleve, J.V. (1983) “Conceivability and the Cartesian Argument for Dualism”, Pacific Philosophical Quarterly, Vol. 64, No. 1, pp. 35-45.

Kripke, S. A. (1980) *Naming and Necessity*, Harvard University Press, Cambridge, (邦訳『名指しと必然性』八木沢敬／野家啓一訳, 産業図書, 1985 年)

Putnam, H. (1983) “The Meaning of ‘Meaning’” in *Mind, Language and Reality*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 215-71

── (1990) “Is Water Necessarily H_2O?” in *Realism with a Human Face*, ed. J. Conant, Harvard University Press, Cambridge, pp. 54-79.

Yablo, S. (1993) “Is Conceivability a Guide to Possibility?”, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 53, No. 1, pp. 1-42.

〔哲学修士課程〕